

平成24年度北九州市地方独立行政法人評価委員会（第3回）

日時：平成24年8月1日（水）

14:00～16:00

場所：北九州市役所 15階

特別会議室B

（事務局）

ただ今より、「平成24年度第3回北九州市地方独立行政法人評価委員会」を開催いたします。

それでは、議事に入る前に資料の確認をさせていただきます。お手元に配布してございます資料の1枚目が、本日の次第でございます。

次に、資料1は「実績報告に関する確認事項及び回答」でございます。「平成23年度業務の実績に関する報告書」に関しまして、委員の皆様からご提出いただいた調書の中に、大学に対する質問がございました。その項目に対して、事務局で抽出いたしまして、大学に回答を求めたものでございます。

次に、資料2は、「公立大学法人北九州市立大学の業務の実績に関する評価結果（案）」でございます。各委員のお手元に配布してございます、今回の「作業ペーパー」A3版のものがあると思います。こちらでご審議していただきまして、その内容に従って、事務局で再度まとめ、次回の委員会で評価結果を決定していただきます。その際に、またこちらの資料2を作成し直すこととなります。本日の資料2は、いわば、ひな型のようなものでございます。最終的にこういうものが出来上がるということでご覧いただければと思います。今回、こちらは見ていただくだけで結構でございます。

なお、「作業用ペーパー」でございますけれども、ご覧のように委員の皆様の名前が評価のところに記載されてございますが、この資料自体は公表いたしません。これは、あくまでも「作業用ペーパー」でございます。これを申し添えておきたいと思っております。

そのほかの資料といたしまして、前回お配りいたしました諸資料がブルーのファイルに入っております、こちらでも今回の議事に使用することがございますので、お持ちでない方は、私どもにお申し付けください。皆様、こちらは本日お持ちでしょうか。よろしいですか。

次に、議事に関して1点変更がございますので、最初に申し上げたいと思っております。次回、第4回委員会では、学長との意見交換会を予定してございます。当初、本日の委員会で予定しておりました「平成24年度計画」に関する説明及び質疑応答についてですが、こちらは平成24年度ですから、来年度の評価に関するものでございます。こちらに関しまして、本日举行予定でしたけれども、学長との意見交換が次回にございますので、そちらと合わせて、「平成24年度計画」について、大学からご説明いただきたいと思います。そういうことで、こちらのほうの日程が少し変わったという形でございます。

議事に先立ちましてご報告でございます。ご了承のほど、よろしくお願いいたします。

それでは、議事進行につきましては、委員長にお願いしたいと思います。委員長、よろしく願います。

（委員長）

それでは、議事に入らせていただきたいと思います。

まず、資料1の「実績報告に関する確認事項及び回答」につきまして、これは先般から

出ていることにつきまして、質疑をしたいと思います。事務局からご説明をお願いします。

《事務局より説明》  
《大学より説明（資料1）》

（委員長）

ありがとうございました。ただ今の質問事項、あるいは確認事項として出てきたことに  
対する評価並びにその回答ということで、大学からご説明がございました。委員の皆様、  
この件について、ご質問、ご意見等何かございませんでしょうか。よろしいですか。

（委員）

あるといえばあるのですけれど、1点、例えば、1枚目の中期計画のNo.27で、ドク  
ターの充足がなされないの、それを修士に振り替えたというのは、ドクターが充足できな  
いという現実的な問題がある。しかし、文科省から充足しろと言われる、それで振り替え  
ましたと。それは、現実的な対応で分かるのですが、しかし、現在、国を挙げてドク  
ターを増やそうとしています。例えば、OECDの中で、ドクター進学率を考えると、日本は  
どん尻から数えたほうが早い。ですから、一気ににはできないので、まず質を上げよう  
と。そして、それを追いかけるように量を増やしていきましょう。質を上げるというのはど  
ういうことかといいますと、質を上げることによってドクターはいいという評価を得て、そ  
れによって、量を第二次に上げていこうという考えで、国を挙げて動いているときに、こ  
のシフトによる解決策は、ある意味では安易ですよ。

いろいろな努力をした結果、やむを得ずこれ以外の回答がなかったというのなら仕方が  
ないかもしれませんが、この安易な解決をとる前に、もっといろいろな努力の方法はなか  
ったのかということを考えていただきたいと思います。これは、学長に言ったほうがいい  
のかもしれませんが、いろいろあるのですが、他大学ではいろいろやっています。言え  
ば長くなりますので、そこを是非考えていただきたいと思います。

（大学事務局）

大学院の定員の充足というのは、教育面にすごく大きな影響がある大事なことだと思  
います。ただ、世の中全体に需要もある中で、前期は定員の130人がぎりぎり埋まっ  
ている。後期のほうが32人に対して15人、ここ2年は定員を切っているような状態  
です。したがって、指摘される40%を平均で切っているというのは、さらに悪い状態にな  
るという状況でございましたので、この中で一応指摘されたことを改善しました。今、言わ  
れましたように、少し安易なというのはおっしゃるとおりだと思います。ただ、実はも  
ともと、前期への進学につきましては、学部開設当時に少なくとも6割を1つの目安とす  
るということを目的としていました。これは250人の定員に対して6割だと大体150  
人です。そして10年経って、次の150人を目指す。本当は7割ぐらいにしたいので  
すが、なかなかそこは厳しいと思いますので、1つのめどは6割だと考えています。

そして一方、大学院の後期課程のほうですが、これについては、やはり、いろいろな研  
究だとか、あるいは前期に対する影響とかも相当ありますので、それが強いては学部へも  
影響するのではないかとも思っています。したがって、実は、この中で「前期でのアジア  
の学生の確保」と書いていますが、後期につきましても、委員の皆さまもご存じかもしれ  
ませんが、ベトナムの先生方のドクターの修得といったようなことで、ベトナムでの施策  
等も聞いております。我々もそういったことを含め、いろいろな後期課程への学生確保も

していきたいと考えています。実は、先月の教育研究審議会の中で承認されましたが、ベトナムのハノイ大学などと大学間協定を結びました。ひびきので「ベトナム政府留学生派遣事業で Project 9 1 1」といった計画に手を挙げられる条件を作っていく、1人でも2人でもそういった優秀な学生を確保するという努力を、他も含めてやっていきたいと思っています。

(委員)

分かりました。それでは、今回は暫定的な緊急措置でこうしたのであって、いつの日か必ず元に戻しますというくらいの気合いはほしいですね。

(大学事務局)

ぜひ、ドクターの後期のほうについては、研究の厚みということから考えると、ドクターがやはりしっかりとすると、質が上がると思います。

(委員)

昔、私が在籍していた大学では、その時残念ながらドクターコースはなかったのです。そうすると優秀な学生がドクターに行けないことになります。また、ほかの所からもドクターもない大学かと1つ下に見られるということで、やはりつらい思いをしました。

ドクターが薄いというのは、考えられている以上に社会的影響は非常に大きいと思いますので、いつの日か必ず元に戻すというくらいの考えでやっていただきたい。

(大学事務局)

ドクターが薄いと、どうしても前期から進学先で優秀な学生は取らないということ、現状、そういう動きがあるのは事実です。

(委員)

それも含めまして、お願いします。

(委員長)

それに関連して、1つよろしいですか。今、委員からお話があって、お答えがあったとおりなのですが、やはり、1つは北九大がアジアに向けて人材育成をし、「国際的な人材の育成をしよう」と、いろいろとやろうとしておられます。日本人だけを対象にするのではなく、アジアからの留学生を迎え入れて、その人たちをきちんと、国際的に活躍できる人材にして国へ帰してあげる。これもまた私は大事なことだと思う。実は、私は台湾の教育長や、他の国も2、3行ったところ、アジアの国々からの大学院に対する要望として、とにかく日本の大学院で博士号をきちんと出してもらえないということ、これに対する要望が非常に強いのです。これは理系だけではなくて、理系はまだいいのですが、文系は特に強いのです。

理系の場合は、日本で学位を持って帰れば、向こうでかなりの地位に就けるわけですが、ところが、文系も大学院まで出て帰ると、向こうの官庁や教育関係の高い職に就けるわけですが、みんな学位が無い状態なのです。こういうことに対して、非常に要望が強いのです。それには、ただ単に人数の問題だけではなくて、大学院で北九大として独特な教育、特色ある大学院教育をやるのだと。これによって、海外から来る大学院の学生の魅力を高めてやる。だから、日本人相手に日本人学生だけではなくて、そういうことも含めて、是

非、北九大として大学院、特に後期の博士課程の充実ということをお願いしたい。これは、学長に言うべきことなのかもしれませんが、そんな気がいたしますので、是非、そういうことを踏まえて、よろしくお願いいたします。

(大学事務局)

実は、大学院で、例えばゼミでいろいろな教育研究など、いろいろな活動のときに、ドクターの学生と修士の学生と両方、あるいは学部の学生も一緒に勉強する場合、海外の方がおられると、どうしても会話が英語中心になったりするなど、そういった効果もかなりあるのだろうと思うのです。いろいろな世界の人と交流するなど、そういうつながりを持つということも大事ですし、直接的なそういう教育面のプラスもかなりあるのだろうと思いますので、そういう意味でもしっかりタイアップして優秀な方を接点につながりをもっていきたいです。

(委員長)

もう少し言いますと、大学院で日本へ来たいという人たちは結構いるのです。ところが、今ひとつ魅力がないということで、アメリカに行ってしまうのです。こんなことを言うのはと思いますが、そういうことが多く、例えば、昔、日本で留学生として勉強して帰って行ったあと、そのお子さんが日本へ来ないのです。父親は留学生として日本へ来て勉強しているのに、なぜお子さんは日本へ行かせないのですかと言うと、ややそういう魅力に欠けると言います。だから、そのときに、向こうで言うのは、日本語の教育をしっかりと、それに対して日本でも学位を出してほしいと、こんなことだったような気がします。是非お考えください。

何かご質問はございませんか。

(委員)

直接これに関係ないのですけれども、中期計画を立て、それから年度計画を立てておられますが、中期計画を立てたときに、6年間の年度計画を立てておられるのでしょうか。

(大学事務局)

中期計画を作るときに、年度計画を6年間分作っているかということでしょうか。

(委員)

展開をされているわけですね。

(委員長)

違いますよね。

(委員)

例えば平成23年度が終わったら、次は平成23年度を反省して、課題を平成24年度に反映して計画を作るといえることですか。

(大学事務局)

そういう形をとっています。ただ、実際、中期計画6年間分を作りますが、大きな事業についてのおおまかな目安というものは、6年間分用意していますが、全ての項目につい

て6年間分を年度計画として作るということはないです。やはり、平成23年度計画を作  
って、その進捗状況を見たうえで、平成24年度計画を作っていくというような方法で  
やっています。こういった評価委員会などの意見等も踏まえた形で、翌年度になるかもし  
れませんが、反映させていくということをやっています。

(委員)

通常でしたら、中期計画で最終年度にここまで持っていこうという目標を立てますね。  
そのために、各年度でこういう方策を打って、その目標を達成していこうと。駄目だっ  
たら、翌年にその課題を持っていき、目標を変えたら、下げてはいけませんけれど、その  
ための方策を考えてPDCAを回していくと。達成できたものをSDCAとして、日ごろ  
の仕組みの中に入れていくというのが普通だろうと思うのです。毎年毎年、計画を立て直  
すとぶれるのではないかと思うのです。

(大学事務局)

大きなところでは作っています。70項目全部ではないのですが、基本的な考え  
方としては、2年単位で見えています。1つは、2年単位で見ているのは、役員、例えば学  
部長や、センター長などは2年任期ですから、平成23、24年でここまで持っていこう。  
そして、平成25年、26年でここまで持っていこう。最後の2年間はこうしようという  
形で考えております。

分かりやすく言いますと、最初の2年間で計画を作って、全てのものの実施計画まで作  
成して、実施まで何とか持っていこうと。平成25年度は、大体カリキュラムの再編だ  
とか、そういったところの新しい仕組みをスタートさせていくとか、そのようなところ  
です。そして、平成27年度は、認証評価というのを受けるような形になってきます。そして、  
残りの2年間でチェックが終わって、新しい取組みを考えていながら修正をしていく  
というような考え方で見てもらいたいと思っています。だから、ほとんどの事業が平成25  
年度からスタートしていくという形です。

ただ、そこで若干遅れてくるのが、社会人教育のところは大きな項目ではありますが、  
地域創生学群が平成21年度にできて、そこで社会人教育を行っています。完成年度が4  
年間で見たときに、どうしても一応の成果を踏まえてということで、社会人教育の充実  
についての調査というもの、あるいは次の施策というものは、平成25年度以降から始めて  
いこうかというようなことで考えています。

大きくは6年間を、2年、2年、2年、そして、計画実施、2年間実施、チェック、そ  
して次期中期計画に向けた取組みというところで大きくは捉えて、計画を立てているとい  
う状況です。

(委員)

特に意見というようなことではなくて、中期計画としては、6年というのは少し長すぎ  
るなということで質問をさせていただきました。

(大学事務局)

経営審議会などでもよく言われます。6年間は長いと言われるのですが、必要があれば  
その時点で、前向きな変更であればやっていかざるを得なくなると考えています。

(委員長)

ありがとうございます。今のお話で、少し余分なことを言いますと、順調に計画を立てて、それどおりやっていけばいいようなものは割と楽です。ところが、先ほどの外国語教育のようなものは、計画を立てて数値を決めても、今度はどの学部に対して、どれだけの質なのかという、質の問題になってきます。そのようなものに対して、やはり、年度の計画だけではなく、それを修正しながらやらざるを得ないというところがあるのだらうと思います。

(大学事務局)

おっしゃるとおりです。

(委員長)

分かりました。ほかによろしいですか。

(委員)

お尋ねしたいことがあります。今の資料1の質問と回答を聞かせていただいて、2ページ目の社会貢献のところですが、中期計画のNo.41で、実施された結果としての満足度、要望などのデータはあるのかということで、公開講座の実施状況の表を拝見しましたけれど、これを拝見しながら、ふと思ったのですが、逆に、結果の実施状況ではなく、こういった公開講座の募集やそれに対する広報、あるいは出た結果をPRするというようなことは、大学としてどういう形で行っておられるのかなと思いました。というのも、大学というのは教育と研究という大きな2大柱があると思うのですが、それを公立大学として社会に貢献する、あるいは還元するには、知っていただくことが一番大事ではないかと思ひまして、質問させていただきます。

(大学事務局)

公開講座については、基本的な流れとしては、まず前年度の終わりに企画案を作ります。そして、「市政だより」とポスター、それと役所関係の部局、あるいはモノレールの駅などといったところに案内を置いたり、ポスターを貼ったりというような形で周知を図り、募集をしているということです。

また、実施したことに対して、新たに報告書を作るというようなことは、公開講座の性格上やってはいないです。ただ、こういうことを実施したということは、もう1つは、ホームページでも当然載せています。社会貢献というタブを設けていまして、その中で大きく取り上げています。

実際、法人化した当初というのは、6件か7件ほどしかしていませんでした。どんどん増えてきて、昨年度は14件で、かなり増えてきているということは、ある程度周知されてきているため、参加者が増えてきているのだと考えております。

(委員)

ありがとうございます。多分、「市政だより」あたりでPRしておられるのだらうなということは思っておりましたけれども、特定の層の方にはそれが届くかもしれませんが、市民に広くということになると少し弱い部分になるかと思ひます。何かご提案できれば一番いいのですけれども。特色あるPR方法というのを、前にテレビで見ました。筑波でしたか、「町の中をロボットが」という番組がありまして、ものすごく面白い試みだなと。そういったユニークな取組みもされたらいいのにと、少し質問と回答を聞きながら思ったもの

ですから発言させていただきました。ありがとうございます。

(大学事務局)

いろいろ検討させていただきながら、いろいろな知恵を出しながらやっていきたいと思  
います。

(委員)

また少し戻りますけど、先ほどのドクターのところ、私も同じご質問をさせていただ  
いたのですけれど、少し私が勘違いしていたのかもしれませんが、この変更後の定員の 12  
名というのはどこまで拘束されるのですか。ものすごく応募が多かった場合、13 人取っ  
たり 15 人取ったりということはあるのですか。

(大学事務局)

大学院の場合、特に柔軟に取っているのが実情です。ただ、認証評価が正直言ってかなり  
厳しいというか、細かいので、そこではやはり 70%という、つまり前後 30%で見ます。  
それで 70%を満たしていないと少ないということで指摘を受けますし、30%を超えてい  
ると取り過ぎだということで指摘を受けるという。それは形式的にそういう紋切り型でき  
ます。だから、前後 30%というのが、1 つの目安になります。

(委員)

私は、単純に前期でたくさん増やすと、これはこのまま後期も行きたいという方が増え  
るだろうというもくろみを大学がされたのかと思い、それでこういう考え方もあるのかと  
思ったものですから。

(大学事務局)

工学系につきましては、どうしても大学院の前期課程まで、卒業、修了して、技術屋と  
して、就職口が非常に出てくるというような面があって、そこは、やはり、就職市場が文  
系と少し違うのです。

(委員)

前期で、そこまで就職に活かそうというのが多いわけですか。

(大学事務局)

前期までを 1 つ評価して、学部との連携の中で前期までの教育をまず強めようという  
ところで、今、まさに取り組んでいるところです。大学院の博士課程については、先ほど話  
があったとおりで、何とか底力をつけていって、その充実まで図っていければというも  
くろみは持っています。

(委員)

分かりました。ぜひ、後期の応募が増えたらいいですね。

(委員長)

おそらく、理工系は、前期のほうが多いのではないのでしょうか。多いというのは、後期  
を出た人を企業がなかなか採用しないからです。後期を出た人は、本当に専門職か研究職

かということになるので、そのところはなかなか難しいところだろうと思います。そのような傾向はございませんか。

(委員)

そうですね。あります。これはあまり言うてはいけないのですが、ドクターを就職させる技量を持ったプロフェッサーというのは無理だと言います。修士までですと、非常に General Education の要素があるからまあいいだろうとなりますが、ドクターまでいくと専門的になるのでそうはいかない。企業によっては、教授ごとに採用を検討しているといったこともあると聞いています。そうすると、やはり、教授の技量も上げないとなかなかドクターには来ないし、かつ就職は難しいということになります。

(委員長)

そうなのです。おっしゃるとおりで、とても難しいところです。もう1つは、先ほどから出ているように、文科省の定員充足率というのが表に出てくるのです。ただ、文科省も少し余計に取ることにについてはあまりクレームをつけません。ですから、15人が20人になっても問題ありません。足りないことに対して、非常に厳しいのです。

もう、よろしいですか。それでは、そろそろ次の議題に移りたいと思います。これから評価の審議を行いますので、大学の関係者の方、これでご苦勞さまでございました。結構でございます。

(大学関係者退室)

(委員長)

それでは、評価についての審議に入りたいと思いますが、お手元の作業ペーパーを中心にご審議いただきたいと思います。つきましては、まず、事務局からご説明をお願いします。

《事務局より「I教育」分野についての説明》

(委員長)

分かりました。ありがとうございます。まず、「I教育」分野の項目別の評価について、それぞれ委員の皆様、かなり好意的に評価をされていると思うのですが、その中で、若干特別な意見があり、こういう結果が出ているということで、それを基に、事務局にまとめていただいたものでございます。次に「I教育」の分野別評価について5つございました。ただ今の、Iの教育について、委員の皆様、何かご意見ございませんでしょうか。よろしいですか。

(委員)

最後の「理事長、学長のリーダーシップの」は、一番上に持ってきたほうがよろしいのではないのでしょうか。

(委員長)

そこはむしろ、まず、全体の評価できるという点で、最初にあったほうが良いような気がします。そのことに関連して、これは表現しなくても分かるのでしょけれども、その

文章で「今後とも、教職員の相互理解の増進を図り」とありますが、これは何についての相互理解なのかと、少し漠然としているわけです。ですから、入れるならば、例えば「教育の向上並びにその特色を発揮し、優れた人材の養成について相互理解を図る」など、何か入れるべきだと思います。

そういう意味で、最小限度教員が向かう研究なら研究、あるいはここでは教育ですから、教育について、先ほど言ったように、「特色を発揮し、あるいは国際的な人材を養成する」などとするほうがいいのではないのでしょうか。

(委員)

文章で、私もいろいろと迷ったのですが、どうしてもこのように各項目について、「期待される」とか「期待する」とかという言い方になってしまうのです。それは仕方がないのですが、もし、それで文章の最後を止めるのであれば、今、ここでは「期待したい」と、「期待する」の2つあるので、何か統一されたほうがいいのかと思います。

(事務局)

「期待する」にしますか。分かりました。

(委員長)

そうです。委員会を中心的なものとして、書いていただければと思います。

(事務局)

「理事長、学長のリーダーシップ」が一番先頭という形でよろしいですか。

(委員長)

これは、何も5つに分けなくてもいいです。例えば、「理事長、学長のリーダーシップに」というところと、一番上の「教育力の向上に向けた多様な」というところを一緒にして、5つに分けなくても4つに集約できれば、いい気がします。

(事務局)

一番下と一番最後をまとめさせていただきます。

(委員長)

最後のところの「今後の向上を期待する」というのは、別のところと一緒にして、少しまとめていただければと思います。

(事務局)

分かりました。

(委員長)

細かいところは、よろしいと思います。それぞれの委員の皆様、大変知恵を絞って評価され、そのとおりだと思います。だから、全体評価はこのようになるのだけれど、それぞれの委員の皆様の評価がありますので、それをどうぞ特記すべき事項の中に組み込んでいただいて、委員会としての意志を大学に伝えていただくということによろしいと思います。

それでは、どうぞ、次の議題のほうへ。

《事務局より「Ⅱ研究」～「Ⅳ管理運営」分野についての説明》

(委員長)

ありがとうございました。分野別Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、項目別、並びに分野別の評価ということでした。どうぞ、委員の皆様、ここでご意見等ございましたら、それをまとめますので、どうぞ遠慮なくおっしゃってください。細かなことでも結構でございます。

(委員)

特に、結果には異存はございませんが、「社会貢献」のところですが、私は国立大学と私立大学にいた経験がありまして、そういうところでは皆さん、自分の研究・教育に時間を費やして、例えば、市民集会や小中学生との連携なんてことをするのは、あまりポイントにならないということで、社会貢献的な仕事は嫌がるのです。ところが、この北九州市立大学では、皆さんよくやられているので、Sにいたしました。各Ⅰ～Ⅳのポイントが、大学事務局と変わらないのに、全体評価だけがSに変わるというのはおかしいと言えればおかしいのですけれども、よくやられているかなと思います。

(委員長)

おっしゃるとおりだと思います。非常に、「社会貢献」の分野は、この分野別評価に出ている以上に、感覚としてはやられているという気は私も同じでございます。ただ、この内容でいくと、ということになります。しかし、その意見は非常に貴重です。では、そこに関連して申し上げますと、Ⅲの分野別のところの全体評価ですが、ここも、2番目に書いてある地域貢献活動部門賞の受賞というのをトップに持っていったらどうでしょう。せっかくこのようないいことをしているわけですから、前面に出して、評価してあげていいような気がします。

(事務局)

はい、一番頭のところですね。

(委員長)

一番上のものを、3番目または4番目に、少し後ろへずらしてあげれば、それでいいと思います。

それから、細かいことになりますが、Ⅱの1の分野別評価のところ、文章が書いてあるのですが、「環境首都北九州市」という表現が適切なのか確認したほうがいいと思います。

(事務局)

現在の適切な表現を確認いたします。

(委員長)

それから、同じようなことですが、最後のⅣの分野別評価、「管理運営」のところ、最後のところの言葉に「プロパー職員」というのが入っているのですが、大学の「プロパー職員」というのは一般的ですか。

(事務局)

「プロパー職員が市民に分かるかどうか」ということですが、去年からできるだけ片仮

名を漢字や平仮名に直そうとしています。「プロパー職員」は一般的にわかりづらいのではないかと思います。

(委員)

ここは、私が書いたものだと思います。私も「プロパー職員」という言葉はあまり耳慣れなかったのですが、昨年も一昨年も、大学側からの説明に、確かそういう言葉が使われていたのです。それで、ああ、そうなのかと思いました。

(事務局)

おっしゃるとおりです。できるだけ片仮名を日本語に直そうということをしなければいけません。これは私どもに考えさせてください。

(委員長)

よろしくお願いいたします。

(委員長)

どうぞほかに、何でも結構ですから。

(委員)

「研究」のところで、分野別評価のところに挙げているのですが、この一つ一つの年度計画の成果として、受託の獲得件数や助成金の額といったものがあるのですが、そういうものも1つの尺度になるのだらうとは思いますが、もう少し北九州市立大学がいろいろな人の役に立っている、市民、国民にとって役に立っている、そういう面での評価指標というのは何なのだろうかと思います。特許が本当にそういう評価指標になるのかどうかは、よく分かりません。あるいは、北九州市立大学が知恵を出してパートナー企業と作った新しい製品が人の役に立っているなど、何かそういうような指標というものがないのかなと思いました。

(委員)

そうですね。北九州市から受託したとか、ここにたくさん書いてありますけれども、それは手前のことですね。

(事務局)

全体評価の中で、どこまで書くのかという問題もあると思います。

(委員)

よろしいですか。少し迷ったのですが、大学の目的は、研究と教育といいですね。ところが、「社会貢献」になると、この書類に入っているのは、教育的な貢献ばかりです。だから、本当は、研究からの社会貢献もあるべきなのですけども、そこは抜けているのです。例えば、地元と共同研究した、何かベンチャーをつくってそれが北九州市にフィードバックした、などということがあっても本当はしかるべきではないかと思います。

(事務局)

そのような表現をどこかで入れますか。どうしましょうか。

(委員長)

よろしいと思います。やはり、おっしゃるとおりで、大学のひとつの目的は研究が非常にメインです。したがって、ここは特色のある研究で、その結果、こうやって地域にも、というようなのがぜひ欲しいので、入れていただければと思います。

(事務局)

分かりました。先ほどの指標の話は入れにくいと思うのですが、大きな方向性として文章をどこかに挿入するということにいたします。

(委員長)

例の水分が少なくてすむ消火器の開発は終わってしまったのですか。消えてしまったのですか。あのような研究がもっと進んでいればと思います。

(委員)

されている先生がいらっしゃいます。今度は、北米の山火事に対応するということで、ますます発展していますから、このようなものもずばり社会貢献です。

(委員長)

あれは大きいと思います。だから、そういうものなどですね。

(事務局)

製品化ですね。社会貢献と商品化、研究開発、どこの項目かという、「研究」の項目から発生させるような形でしょうか。

(委員長)

でも、たとえ商品化されたとしても、社会にとって有用なものであれば、本分が研究から始まっていますから評価できると思うのです。そういう形でいいと思います。

(事務局)

分かりました。研究からですね。

(委員長)

それから、もう1つ余分な話で、北九州市立大学はロボットの研究というのは進めていないのですか。例えば、安川電機が非常にロボットの研究をされています。企業と大学とで、今はあまりやっていないのですか。

(委員)

やっています。魚のロボットがテレビで何度も出ていました。

(委員長)

それはそれでいいのではないですか。ほかと一緒にやっているということで。

(事務局)

ひびきののF A I Sかどこかで、大学を集めていろいろやっているところがあったと思います。

(委員長)

確かそのようなものがあったような気がしたので。

(委員)

はい。飛行場に行くと、子どもが喜ぶと陰が映るものがありますが、あれは九工大がされたのですよね。ああいうものも、非常にユニークな研究だと思います。

(委員長)

項目に入らなければ、その分野別の中の1つにそういう言葉で入れられませんか。なぜなら、やはり北九大は地域貢献が1つの特色です。

(事務局)

はい、分かりました。

(委員)

今のことは、工学系のことだと思うのですが、同じことは、この文系の研究の36番「地域に関する研究」で、いろいろな提案や提示をされていることに対して、皿を付けたのですが、なぜ皿にしたかということ、本当にこういった研究をされたことが、政策や地域課題を解決することに役に立ったかどうかというのがよく分からず、大学として、役に立ちましたということまで今後何か表現をしてくださればいいなと思い、皿と付けました。

(事務局)

文系ですね。

(委員)

例えば、都市政策研究所なんていうのは、何年度にこれだけしましたというような冊子を出してくださるのですが、この交通量がどうなったのかというような、それぞれの研究はすごいと思うのです。では、それを基にして、どういうことに社会問題の解決につながったのかなど、分かっている部分だけでもいいので、きちんと成果を表していただくと大変分かりやすいと思います。

(事務局)

成果ですね。

(委員)

ええ、期待したいのですが、表現の仕方、大学としての成果の表し方に問題があるのではないかと思います。もっと具体的に、こういう研究をしてこうなりましたということが、分かっているものがあるのであれば示してほしいと思います。

(事務局)

はい。次回までの宿題と受け取ってよろしいでしょうか。

(委員)

そうですね。今、示せることがあれば、お願いします。

(事務局)

はい、分かりました。

(委員長)

ほかに、どうぞ。よろしいですか。

(委員)

私も、公立大学の北九州市立大学としての社会貢献ということを少し考えたときに、やっておられる社会貢献は本当に、先ほど委員が言われたように、すごく評価できると思いますし、よくやっておられると思ったのですが、逆に、求められるレベルが、普通の大学よりも、より高いのではないかということで、内容のⅢやⅣからすると、Aかなと思ったのですが、あえてⅡを付けさせていただきました。Aとしての評価に異論はありません。

どこが足りないのかということ、先ほど明確に言ってくださって、研究からの社会貢献、そういったものが少ないのではないかと。結果としていろいろ出しておられるのは、総花的といえますか、これもある、これもある、これもある、というのですけれど、やはり、そののところをもう少し大学として整理されると、向かうべき方向も少し決まってくるし、もっとレベルも上がるのではないかなと考えています。

ただ、要望としては、ここに書いておられることでいいと思います。

(委員長)

どうぞ、ほかに。

では、私のほうから。Ⅲ-9、普及啓発の中期計画 50 番のところ、これは事務局案で特記事項として残すのですが、50 番は国際化の推進体制の整備ということですよ。その中で、特記すべき事務局案の中で、「事務組織の在り方の検討」とあるのですが、国際教育交流センターというのが組織としてあるわけですから、国際化推進体制のところを、「事務組織の在り方の検討」で進むのではなく、もっと別の観点から進めるべきではないかという気がします。

(事務局)

はい。ここでは、日本語教育体制についての方法や講師の問題など、長い目で取り組まなければならないのですが、そういった講師の問題など、単年度では難しい問題があるという委員のご意見を受けまして、あくまでも、ここは組織の在り方と表現したつもりでした。

(委員長)

それを入れるならば、具体的に国際交流センターの充実・発展という表現でいいですし、それ以外に、全学的な国際化の推進体制、例えば、他でもやっているのでしょうけれど、できるだけ英語による授業の推進など、幾つかある気がします。こういってしまうと、事務組織のところ何か浮かび上がってしまいます。強調されてしまうような気がするので、ほかと並べればいいと思います。

(事務局)

分かりました。

(委員長)

細かい点、いいですか。これは私が意見を出したもので、Ⅳ－6、58 番の「基金の創設」のところで、基金を創設して卒業生などにも広く呼び掛けて募集するほうが望ましいということで申し上げているわけですので、ここの評価はⅢでよろしいです。これは、そうならば望ましいというだけの話です。

(事務局)

分かりました。

(委員長)

というのは、これから基金をつくるときに、募金活動などをしますが、そのときには、幅広く、卒業生なり何なりにやっていかなければならないということがあります。でも、そうならば望ましいというだけの話ですから。

(事務局)

分かりました。

(委員長)

それから、もう1点、前にも申し上げたのですが、Ⅳ－12 の効果的なリスクマネジメントのところ、リスクマネジメント、クライシスマネジメント、これは本当から言うと、リスクとクライシスで、大学の存亡に関わる、大災害、大震災、そういうものがクライシスマネジメントです。それとは違って、通常何かのリスクがあるという場合のもので。

(事務局)

分かりました。

(委員長)

こういうものがあれば望ましいというだけの話です。というのは、この間、副学長もおっしゃっていたように、まだ漠然として、どう捉えていいかわからないといっているわけです。正直言って、これはやりだしたら切りがありません。幅広く、どこまでやるかというのは、そんな簡単には明確にできませんので、それこそ、これからです。

(事務局)

はい、分かりました。先ほど、管理運営事項の分野別のところ出てきましたプロパーという言葉は、多分市民はわからないということでしたが、リスクマネジメント、コンプライアンスという言葉に関しては、一般的に言われている言葉だと判断し残したのですが、これは大丈夫ですか。

(委員長)

大丈夫だと思います。

どうぞ、ほかにも何かありましたら遠慮なく、細かな点でも結構でございます。よろしいですか。

もし、何らかの形で、あとで気が付いて、次の会議までに何かあった場合には、ご連絡してよろしいのですか。

(事務局)

是非お願いします。

(委員長)

では、そういうことでよろしいですか。

なお修正があれば追加し、なければ、もうそれで。

それでは、全体評価についてお願いいたします。

#### 《事務局より「全体評価」の説明》

(委員長)

ありがとうございました。これは全体の評価でございますので、どんなことでも結構です。委員の皆様、どうぞ、何かご意見があれば、おっしゃってください。

(委員)

同じことですが、「北九州市立大学発の新製品開発」というのは工学部系ですが、「新理論の確立」というのは文系のことをいっているのでしょうか。それで、いいのかどうか。

(事務局)

委員の文章そのままなのですが、新理論というのは理系の話ではないかと思えます。

(委員長)

どこの言葉ですか。

(事務局)

3番目の文章でございます。ここで、研究分野につきまして、先ほどのお話の延長上かもしれませんが、「また、」以下でございます。「研究開発成果が、北九州市立大学発の新製品開発や、新理論の確立」、こちら、理論は、間違いなく理系の話だと思います。文系の話であれば、例えば、ビジネスプランとかそういうようなものになるのでしょうか。

(委員)

物理や科学、化学であれば、新理論の確立でいい気がします。ですが、北九大にはどうでしょうか。何か言葉を変えるべきだと思います。

(委員長)

今のお話で、これでは理系的になってしまうということなのですね。けれども、先ほどのビジネスプランの問題や、新しい製品を開発したあとの、それをどのように普及していくかというマーケティングの手法などというものもありますので、そういう言葉が少し入ると、文系、理系両方のことを言うようになる。例えば、新商品の開発、それに関連する

新しい理論というのもあります。それから、一方では、そういうものを社会に普及させていくというような努力もあっていいわけです。そうすれば、つながるのではないかと思います。

(事務局)

はい、わかりました。

(委員長)

むしろ理論が先です。新しい理論の確立などが先に来て、そして、北九州市立大学発の新製品の開発。そして、それを今度は文系のマーケティングやビジネスプランなどで社会に普及させていく、マーケティング理論などで普及させていくというようにつなげれば、一連のものになりませんか。

(事務局)

なると思います。

(委員)

2つ目の教育分野については、「今後とも、教職員の相互理解」とぽんと出ると、やはり気になるところではないでしょうか。何か、もう少し具体的な言葉を1字入れたほうがいいかなと思います。

(委員長)

委員がおっしゃるとおり、私もそこが気になります。教職員の相互理解などでは教育は進みませんので、そうではなく、教育について深く認識を持ち、そして、一生懸命努力する、熱意、やはりそういうもので教育というのは普及していくような気がします。

(委員)

教職員の相互理解という言葉が、その言葉だけで何度も出てくると、意図が伝わりにくいと思いますので、教育研究に関する、お互いの理解を深めてというようなニュアンスだったらいいのではないのでしょうか。

(委員長)

そうですね。深く認識して、そのあと、お互いの中で、そういうものがみんなで分かり合えるというのであればいいのですけれど。それから、モチベーションの向上ももちろん大切なのですが、教員だったら一生懸命教育に尽くすということは当たり前のことです。だから、そこを少し変えてください。

それから、一番上のところで、やはり言葉遣いで大変恐縮ですが、「年度計画が順調に進展していることであり、高い評価に値する」というと、やはり人ごとになってしまいます。ですから、評価委員会としては、進展していることについて「高く評価する」と、我々が高く評価すると言えば、こちらに主体性があります。

(事務局)

わかりました。そのように変更いたします。

(委員長)

それから、4番目の社会貢献で、「特筆すべき事項が多く見られ、極めて高く評価できる」というところは、そのとおりなのですが、ここまで言ってしまうと、Sの評価となります。

(委員)

私もそう思います。「極めて」は。

(事務局)

はい、分かりました。

(委員長)

「高く評価できる」でも十分だと。ただ、それくらいであるのは事実なので、理解はできます。全体評価がS評価ならば、これでいいと思うのですが、今回は「高く評価できる」としましょう。

(委員)

1つよろしいですか。5番目、「管理運営の分野は、順調に実施されていると判断する。引き続き、リスクマネジメントのさらなる強化を図りたい」、リスクマネジメントだけが出てきています。ほかにもいろいろ管理運営はあるので、これだけを出すよりは、例えば、管理精度の向上を図りたいとか、そういうような表現のほうがいいのではないだろうかと思います。

(委員長)

そう思います。ここは、管理運営で、いろいろな教員が、留学生センターやいろいろなセンターをつくってきちんとしているということの評価が1つ入っていいと思います。

それから、もう1つは、それなりに努力して外部の資金をもらってきて、それに基づき、きちんとやっているというようなことも評価できます。ですから、順調に実施されていると判断する中に、組織もきちっとできているし、それから、外部資金により、財政的にも、自分たちの研究をそれなりにやっているというところがあると思います。ですので、「なお、リスクマネジメントについては」くらいのほうがよいような気がします。

(事務局)

分かりました。

(委員長)

ほかにありましたら。よろしいですか。

(一同「異議なし」)

(委員長)

はい、大体よろしいです。

それでは、今後のスケジュールなど事務局からお願いいたします。

《事務局より次回のスケジュールについて説明》

(委員長)

次回の学長との懇談の趣旨は、今回のまとめではなく、来年度に向けてのことだと思えますので、まず、来年度の計画について説明頂いて、それに基づいて学長と意見交換するほうがスムーズにいくと思います。

(事務局)

分かりました。そのように段取りいたします。では、最初に評価を決めていただき、来年に向けての24年度のご説明の後、学長との意見交換という流れで行いたいと思いますので、よろしくお願いします。

(委員長)

どうもありがとうございました。では、本日はこれで終わらせていただきます。